



地方騎士ハンスの受難 3

α L P H α L I G H T

アマラ
AMARA



アルファライト文庫



ケンイチ

一人目の日本人。農業高校出身で、凶悪な魔獣を手懐ける能力を持つ、粋なボンパードール男。北海道出身。

レイン

ハンスを異常なまでに慕う元部下の女騎士。普段は仮面のような無表情だが、実際は、感情の浮き沈みが激しい。

主な登場人物

Main Characters

コウシロウ

四人目の日本人。せんり がん元極道にして千里眼の能力を持つ料理人。静岡県出身。

キョウジ

二人目の日本人。おたくオタクで気弱な性格の高校生だが、どんな怪我でも回復させる魔法が使える。東京都出身。

ハンス

本編の主人公。都では“魔術師殺し”の異名を誇る凄腕騎士団長だったが、ひきもち貴族間での政争に背を向け、みずか へんきよう自ら辺境の地方騎士に志願する。

ミツバ

三人目の日本人。がわい外見は可愛い美少女だが、大食い&怪力が自慢のトラブルメーカー。島根県出身。

イツカ

五人目の日本人。ダンジョンマスターとして無生物にあらゆる機能をくわい しほこう付与できる。酒豪。鳥取県出身。

ムツキ

新たにトリップして来た六人目の日本人。火・水・風・土の四つの魔法を操る、ちょっとオタクなお騒がせ魔法少女。埼玉県出身。

1 準備をする男と女

春というのは、農家にとって特別な意味を持っていた。
種まきや作付けさくづの季節だからである。

冬の寒さを乗り越え、やっと暖かくなつてから、農家は一斉に畑へ仕事に出始めるのだ。
この頃になると、国中のそこかしこで祭りが行われる。

収穫を祝う秋祭りと同じく、豊作を祈願きがんする春祭りは国にとって欠かせないものとなつていた。ハンスと日本人達が暮らす街も例に漏れない。

雪が溶け始めた今の時期は、その準備の真っ最中であつた。

「へー。豊作祈願祭ねえー」

湯飲みに注いだ酒を飲み干したイツカは、感心した様子でそんなことを口にした。
目の前に座っているキョウジは、その酒豪しゅごうっぷりに引きつった笑いを浮かべている。

「朝からいきますね、イツカさん」

「えへへっー」

「いや、褒めてないから照れなくていいですよ」

今二人が居るのは、ケンイチの牧場にある、従業員用食堂だった。

用事があるからと、キョウジがイツカをここへ呼び出したのである。

広さ的にも手頃なそこは、牧場で暮らしている者が集まるときによく使う場所だ。

「で、お祭りと私とどう関係するの？ ゴーレムを労働力として貸し出すとか？」

イツカが街に居着いてから、数カ月が経っていた。

ダンジョンを作り、運営するという特異な能力を持つ彼女は現在、ケンイチの牧場の従業員として働いている。

主な仕事は、そのダンジョンマスター能力のうち、「何かを発生させるトラップ作成」の原理を応用した便利グッズや、ゴーレムの製作。そして、それらすべての管理だ。

高温や低温を発生させるトラップで作った温泉と冷蔵庫は、大きな恩恵をもたらしていた。

とりわけ、イツカの功績で一番大きいのは、やはりゴーレムだろう。

農作業用に設計した、人間を圧倒する腕力と頑丈さを誇るゴーレムを作り、周辺の農村に貸し出したのである。

作物の運搬や畑を耕す作業など、ゴーレムの力が役立つ仕事は多岐に亘る。これによって、農作業の効率が飛躍的に上がり、農家は喜んだ。

その上、イツカにも大きな利点があった。

ゴーレムはプログラムのようなもので動いているため、様々な場所で実際に動かしてもらうことで有益なデータを得ることができ、より良いものを生み出す礎になるのだ。

これらは農家だけでなく、建築現場や工事現場など、労働力を必要とするところにも、すでに大分貸し出されていた。

ちなみに、それを斡旋しているのは、キョウジだったりする。

「やぐらを組むとか荷物運びとかで使いたいの、それもあるんですけど。実は、ちょっと知恵を借りたいな、と思ひまして」

「知恵？ えっ、頭使う系統はムリよ？」

「まあ、確かにそういうの苦手そうですけど。……いや、そうじゃなくてですね」
かなり失礼な言われようだが、イツカはまったく動じていない。

頭脳労働的なものは完全に人任せにすることに決めたので、アホだと思われようがバカだと思われようが、痛くもかゆくもないのだ。

「春祭りって、この街ではとっても大切なお祭りなんです。種とか苗とかも売ったりしますし」

「えー？ そういうのって自分の農場で作るんじゃないの？」

「ものによるらしいですよ。ほら、発芽させるのが難しい野菜とか、苗にするまでが

大変な野菜とか。そういうのはそれが得意な農家さんがそこに持って行って、売るんですよ」キョウジは農業などにあまり関心がなかったので、日本でどのように作物を育てていたのかについては詳しくない。

だが、この街周辺の農村での栽培法となれば、話は別だ。

何しろ、彼の治療魔法の能力を使って治療している相手は農民が殆どである。

時折、農村を回っているのも、農業に関する話は自然と耳に入ってくるのだ。

地球と異なる植物に対する物珍しさもあり、今では日本の植物よりも、この世界の植物についての知識の方が多いほどだった。

「そうなんだー」

酒を呷りながら尋ねるイツカに、キョウジは満足気に頷く。

まだ真つ昼間で皆仕事をしている時間なのだが、酒を飲んでいるイツカへの突っ込みはなかった。

——イツカは酒を飲む生き物。

ここ数カ月で確立された立ち位置だった。

「そうですね。それで、その苗を売ったりするのって、やっぱり一カ所で行った方がいいじゃないですか」

「ああ。だからお祭りで行るんだ。場所的にも一番集まりやすいし」

「そうですね。農家の人達にとっては、その年育てる植物を買い付ける場ですから。とても大事なんですよ」

買う側の農家だけではなく、売る側の農家にとっても大切な場であるの言うまでもない。そこで得た収入を生活の柱とする農家も、少なからずあるのだ。

「ただ豊作を祈願するーってだけでも農家の人には重要そうだけど。そんなのまであるとなると、白熱するんでしょうねえー」

「そりゃもう、すごい騒ぎですよ。一年で一番にぎわいますからね。まあ、初参加のときの僕は飲み食いしてるだけでしたけど」

陸の孤島とも言える地方の街が、このときばかりは活気に包まれる。

その状況を思い出したのか、キョウジは楽しそうに笑った。

「冬が終わって、いよいよ畑仕事本番直前！ って言うところですからね。その景気付けの意味もあって、盛り上がるんですよ。出店とかも出たりして」

「へえー！ 日本のお祭りと似たような感じなんだねえー。それなら、昼間からお酒飲めそうじゃないー」

「普段から飲んでるじゃないですか」

思わず突っ込んだキョウジに、照れ笑いするイツカ。

キョウジは諦めたように溜め息を吐くと、話を続けた。

「それで、知恵を借りたい、っていうのはですね。その出店についてなんです」

「出店？ 何か出すってこと？」

「はい。うちの牧場で何かやってくれないかって、街の寄り合いで頼まれたんですよ」

キョウジは獣医として働いていることもあり、ケンイチの牧場の仕事もよく手伝っている関係にあった。

「なら食い物出せばいいじゃない」

ケンイチの牧場といえは、新鮮な肉やミルク、チーズなどの加工食品と、食べ物に関しては様々なものがある。それらは街でも有名なもので、確かに出店で出せば良い売り上げが見込めるだろう。

だが、キョウジが言う出店とは、そうではないようだった。

「いえ、食べ物系はほら、コウシロウさんが居ますから。うちの牧場は、コウシロウさんの店に食べ物関係を委託してるんです」

「あー。そうなんだあー」

街で評判の料理人としての地位を確立しているコウシロウの店は、ケンイチとキョウジの共同出資という形で作られていた。

肉などの食品の多くはそこに安く卸されており、人気も高い。

当然、お祭りとなれば出店も計画しており、美味しい屋台料理をお手頃な価格で提供す

ることになっている。

「だから食べ物系はそれでいいんですけど。頼まれたのはソッチじゃなくて、なんというか、アトラクションというか、遊戯の方なんです」

「どういうこと？」

「ほら。宝釣りとか、くじ引きとか、ヨーヨー釣りとか」

「あー！」

納得したように頷きながら、イツカはぼんつと手を叩いた。

お祭りといえは飲み食いもそうだが、そういった遊びも定番だ。

イツカは子供の頃のことを思い出していた。

くじ引きで五千円ぐらい使い、力業で数万円のゲーム機を引き当てたこと。

受験でも使わなかったであろう圧倒的集中力をつぎ込み、景品ゲームで大人向けのDVをゲットしたこと。

金魚すくい、危うく水槽に顔面からダイブしそうになったこと。

「碌なことしなかったなあ」

「なにがですか？」

「いやいや。で、その遊戯がなんなのよ？」

「はあ。ああ、なんていうか、日本にあるものと、コッチにあるものって、やっぱりそう

いうのにも違いがあるらしくつてですね。コッチにないものを僕達が作って出店でやったら、盛り上がるんじゃないか、つて話になったんですよ」

「あーあーあー。なるほどねえー」

この世界にも、お祭り定番のそういったゲームのようなものがあるのだという。

そこに、日本のものを持ち込めば、目新しくて賑やかになるだろう。

街の寄り合いで、そんな風に提案されたのだ。

「僕だけで考えるのもあれですし、イツカさんの意見も聞こうと思ったんです」

「そっかあー。他の人には、もう聞いたんだ？ ケンイチさんとカミツバちゃんとか」

日本人は、何もイツカだけではない。

他のメンツにも聞いたのか、という質問は、ある意味当然のものだ。

それを受けたキヨウジは、なんとも言えない微妙な表情を浮かべた。

「いやあー。皆なんていうか。個性的な感じの回答だったもんで……」

頭を掻きながら、キヨウジはその結果をかいつまんで説明した。

まず、ケンイチ。

「祭りんときゃあ、大体バイクころがしたり、さもなきやケンカしてたからよお！ わっ

かんねえーわあ！ あつはつはつは！」

およそ物心がついたときには、そんな感じだったという。

実にケンイチらしいというか、なんというか。

ミツバの方も似たようなもので――。

「食い物のこと以外、覚えてないっす！」

という、実にすがすがしい回答が得られたのだとか。

遊びも好きそうなミツバだが、それ以上に食えることが好きらしい。

元々、ケンイチとミツバの頭脳労働不得意梓二人には期待していなかっただけに、落胆もありなかった。

だが続くコウシロウからの回答は、ケンイチの斜め上を行くものだった。

「子供の時は、食べ物や風車なんかを売ってましたねえ。その後は、仕事で海外やなんかに行っていましたから。あまり日本のお祭りは、行った覚えがありませんねえ」

仕事って、何ですか？

とは聞けなかったという。

多分、何がしかをライフル的なもので、何とかする仕事なのだろう。

おそらく、日本の平均的なオタク系学生として生活していたキヨウジとは、縁もゆかりもない仕事のはずだ。

「まあ、そんな感じで、聞いたけど無駄だったっていうかなんというか」

「なんかゴメン」

「いえ」

居た堪れない気持ちになって、イツカは思わず謝ってしまった。

キョウジはなんとも言えない表情で返事をする、そつと視線を外す。

「まあ、というわけで……。あと聞けるのがイツカさんぐらいしかいなかったんですよ」

「うーん。お祭りの出店ねえー」

「どうせなら、イツカさんの能力とかも使って、派手にやりたいじゃないですか」

暫く考える素振りを見せた後、イツカは思い出したように手を叩いた。

「キョウジくんのことだから、腹案があるんでしょ？ それを聞いて、違うやつ考えた方が建設的じゃない？」

キョウジは成る程と頷く。

それから机の脇に置いてあったかばんに手を伸ばし、中から何枚かの紙を引っ張り出した。

祭りの出店に関するものらしい。文章と幾つかの絵が書き込まれている。

「おおー。やっぱり考えてあるんじゃないかーん。あ、これ懐かしいわあー」

「とりあえず、ポピュラーっぽいのを。文章だけだと分かりにくいと思うんで、ついでに図とかも描いてみたんですけど」

「なら、もつと良いものがあるじゃない？ ジャビコー」

横のイスに乗っていた黒い球体が反応し、ふわりと浮かび上がる。真っ黒なボーリング玉にも見えるそれは、イツカの能力を管理する外部装置で、名前をジャビコという。いわばコンピュータのような存在だ。

べちり。ジャビコを叩き、イツカはニヤリと笑みを浮かべる。

「ジャビコなら、モニターの中で立体映像を作れるからね。説明しやしくない？ ジャビコ、輪投げの映像！」

「了解しました」

機械音声を思わせる声が、球体であるジャビコから響いた。

すると、空中に光で作られたモニターのようなものが出現する。

画面には細長く積み上げられたお菓子やおもちゃなどの景品が映し出されていた。

そこへ、木製の輪が放物線を描いて飛んできて、輪の中心に収まるように景品を捉える。そんな輪投げゲームの遊び方が、見事に再現されていた。

「おお！ すごい！ これなら輪投げを知らない人でも一発ですね！」

「だつしよ？ 必要な道具とかも一目で分かるし、職人の人に作ってもらうのも楽そうじゃない？」

「そうですね！ あり合わせの道具じゃ足りないこともあるでしょうし、便利だと思えます！」

キョウジとイツカは、早速どんな出店が実現可能か話し合いを始めた。出てきたアイデアは直ぐにジャビコが映像化していくので、話し合いは実にスムーズだ。必要な道具の発注などは、キョウジがその場で目星をつけていった。

労働力が必要そうなどころには、イツカが専用のゴーレムを作って対応する。

そうこうする内に、テンションが上がってきた二人の企画は、どんどん大げさな方向へ飛躍していった。

「じゃあ、これは作っちゃいましょう、専門の道具を」

「まじかー。でもできるのそんなこと？」

「職人さんに当てはありますから。それより、こここの部分は？」

「ゴーレムでいけるっしょ」

企画力と、実行力。

そして、それを実現させるためのコネ。

それらすべてを、キョウジとイツカは持っていた。

普段は見られないキョウジの暴走によって生み出された出店の準備は、こうして着々と進められていったのであった。

キョウジ達がお祭りの相談をしていた、丁度同じ頃。

ハンスは駐在所で、レインからの報告書を読んでいた。

ロックハンマー侯爵領主館から、遠話で送られてきたものだ。

その内容にハンスの表情が陰しくなっている。

「セルジュ・スライプスの身柄引き渡し、か。随分かかったな」

セルジュ・スライプス。

以前、ハンスが住む街を襲おうとした、隣国の実験部隊を率いていた男だ。

事前に情報を得ていたロックハンマー侯爵の力と、日本人達の協力により捕縛に成功した相手である。

隣国からの攻撃。一見すると、侵略のような緊急事態ではあるが、この事件には様々な政治的な思惑が絡んでいた。

というのも、実際には最新技術の実験部隊であったセルジュの部隊は、表向きは「隣国で最新技術を盗んだ盗賊」となっていたのだ。

「最新技術を盗んだ盗賊」という立場なら、国境を堂々と越えて侵入しても、おかしくはない。最新技術の運用と実践テストもできる。一石二鳥の計画というわけだ。

実は、この「最新技術を盗んだ盗賊」というのは、ハンス達の国が隣国を揺さぶる常套手段だった。

いつも自分達が仕掛ける手を、他の国に使われる。

国の上層部にとっては非常に屈辱的な話だろう。
 一悶着あった後、結果的にはハンス達現場の兵士が、「盗賊」としてセルジュの部隊を捕らえた。

さて、この「盗賊」達。

ハンス達の国では、特に悪さを働いていなかった。

一応罪はあるが、隣国の最新技術である「使役できる魔獣」を持ち込んだ程度である。だが、隣国にとってみれば、国から大切な実験兵器を盗み出した大罪人だ。

この場合、より重い罪を犯している国に罪人を引き渡すのが、通例であった。

つまるところ、実際にはハンス達の国に危害を加えようとした相手を、政治的体面を保つために、無罪放免同然で隣国へお返しするのだ。

ややこしい上になんとも気の滅入るような話ではあるが、国同士のやり取りというのは得てしてそんな複雑な事情をはらんでいる。

「取調べが長引いたようです。捕まえた人数も多かったですから」

「まあ、一度にすべて送り返すわけにもいかないだろうからな。戦後処理じゃあるまいし」
 レインの言葉に、ハンスは溜め息混じりに言う。

その実験部隊の人数は、ざっと二十人前後に及ぶ。

全員を一遍に移送するわけにはいかないので、こういう場合は数人ずつ、何日か間を置

いて返すのが一般的だった。

人数が多いと暴れられたり、万が一逃げられたりした場合の対処が面倒だからだ。

「どうやらセルジュ・スライプスの引き渡しは、一番最後に回されたようです。当人の希望でもあったようですが」

「部下全員を見送ってから、か。何か含みがあるのかも知れんが」

苦い顔のまま、ハンスはもう一度報告書を頭から読み直す。

何度も書類に目を通す癖は、読み落としや誤読がないようにするためのものだ。

その様子を、レインはいつもと変わらぬ無表情で見つめていた。

ハンスの執務機の隣に置かれた、小さなイスに腰掛ける彼女の姿は、人形のようにでもある。表情がないせいで作り物めいて見えるのだが、その実内心は大きく揺れ動いていた。

何よりも尊ぶべき存在のハンスを前にしたレインの心は、いつだって恋する乙女モード全開なのだ。

もつとも、外見からはそんな本性は一切推し量れないのだが。

「逃走の準備、ですか？」

「それは考えにくいだろう。あるとすれば、自分が戻る前に部下に情報を集めさせておく、といったところだろうな」

「でしようね。彼は国内で微妙な立場のようですから」

「あのセルジュ・スライプスがなあ。どれだけ苦労させられたか分からないんだが」
 先の隣国との戦に、ハンスは「銅走蛇騎士団」という騎士団を率いて参戦していた。
 その戦いの中で、セルジュ・スライプスの名は何度も耳にしている。
 奇襲と奇策で、ハンス達の国の軍隊を散々に掻き乱してくれた。

直接、剣を交えたこともある。

「惜しい。惜しいな、本当に。あれが敵かと思うと生きた心地がしなかったが」

「味方ならどれだけいいか、ですか」

「いっそ寝返ってくれんだろうか、と思うが……」

「戦の最中ならいざ知らず、今はそれも難しいと思われませんが」

地位のある者や才能がある者が国を出て主を変えるというのは、何も珍しくはなかった。
 相応しい恩賞を与えてくれる相手に仕えるのは、むしろ推奨されることだ。

自分の価値を正しく理解してくれる主の下で働く。

それが、ハンスの国や周囲の国々にとつての騎士道なのだ。

とはいえ、そういったことがまかり通るのは混乱の最中だけであった。

平時は様々ながらみがあり、そうもいかない現実がある。

どんな世界であっても、理想とは追いつかないものだ。

「今回はお互い本気での殺し合いではなかったから良いが。敵としてなら、戦場では二度

と会いたくない男だ」

「同感です。随分、煮え湯を呑まれました。今回は一矢報いました」

「だな。あの一件が彼の評価にどう響くのか。場合によっては、彼が隣国を出ることもあるかも知れないぞ」

実験部隊が壊滅、捕縛された結果を理由に、セルジュは死刑を宣告される恐れもある。

そうなれば、十中八九セルジュは脱獄し、隣国を捨てるだろう。

常人ならば難しい選択を飄々とやりきってしまう剛胆さが、セルジュという男にはあった。

そういった身軽さが、彼にも、彼の生抜き部下達にもある。

だからこそ、本件のような裏仕事を任されたのだろうが。

「部下を先行させておいて、情報を収集。場合によっては国を脱する、ですか」

「そうするだけの権利が、彼にはあるだろう。あれほどの功績を挙げた実力のある男を、使い捨てのように扱うというのは、俺には信じられん」

ハンス達の国にとってみれば、散々苦戦させられた男だ。

逆に、隣国にしてみれば、英雄的な働きをしたと評価されるべきだろう。

だが彼に対する現在の扱いから判断すると、隣国はそう思っていないらしい。

「私も一人、不当な扱いを受けている方を知っています。救国の英雄にも拘らず、田舎に

追いやられている方です」

「なるほど。ならばその男は幸せだろう。戦場を駆けずり回って死ぬより、片田舎でのんびりやる方がずっといい。もつとも、最近随分賑やからしいがな」

「それは災難ですね」

肩を竦めて笑うハンスに、レインは表情を変えることなく言う。

傍目からは一切分からないが、ハンスにはレインが笑っているのが分かった。

子供の頃からの付き合いである二人は、おおよそお互いの意中を察し合える仲なのだ。

とはいえ、レインが直隠しひたかくにしている感情は、ハンスにも読み取れない。

一頻り笑うと、ハンスは改めて紙面に目を落とす。

「そのセルジュ・スナイプスを領主館から中央の連中に引き渡すとき、立ち会うように、か」

「捕まえた場所の責任者は、ハンス様ですから。当然かと思えます」

「そうだな。しかし面倒だな。祭りも近いのに」

春祭りは、ハンスにとっても大きな楽しみだった。

準備をするのも、そのお祭りそのものも。

街が賑やかになり、いつもより仕事は増えるが、住民の皆が楽しんでいる雰囲気は、得がたい喜びを与えてくれる。

「それにしても。コウシロウ殿の同行を求む、というのは」

ハンスは深刻そうに呟き、書類のその部分に目を走らせた。

そこには、できれば、という枕詞まくらごころばを付けて、千里眼せんりがん、コウシロウ殿にも立ち会って欲しいという内容が記載されている。

レインはコクリと小さく頷くと、いつもと変わらぬ平坦な口調で言った。

「それだけ、警戒しているのでしょう」

「気持ち分かるが、国内の、ましてやロックハンマー侯爵のお膝元ひざもとで何か起きると思えないんだがなあ」

「奇策とは、おおよそそういった不可能を可能にするものだと思いますが」

ハンスは思わず苦笑を漏らす。

コウシロウの千里眼は、こと索敵能力さくてきに関しては完璧な性能を誇っている。

ロックハンマー侯爵は、それをよく知っていた。

だから今回の引き渡しひきわたしのとき、不測の事態に備えて、その力を借りたいらしいのだ。

しかし、コウシロウはあくまで一般人である。

そのため、命令ではなく、あくまでもお願いという形で要請ようせいしてきていた。

「イツカ殿のダンジョンや、魔石の大鉱脈まごいしのだいこうみづでもない限り、コウシロウ殿の千里眼は欺けませんから」

「隠密魔法を見破ったときは、流石に驚いたが」

ここ数カ月、ロックハンマー侯爵の協力を得て、日本人達の能力の調査が進んでいた。得体の知れない彼らの能力が、どんな種類の力なのか把握することも、領主として当然の仕事だろう。その調査事項の一つが、コウシロウの千里眼の精度の解明だった。

相変わらず遠方視についての限界は不明だったが、分かっている部分もあった。

その成果の一つが、「隠密魔法を見破る」というものだった。

イツカのダンジョンや巨大な魔石鉱脈のような、尋常ではない力とはともかく、個人で使う程度の隠密魔法であれば、コウシロウの千里眼は簡単に見破ってみせたのである。

「しかし、こう正面から来られたら断れんだろうと思うんだがなあ、普通。お願い、といつても強制に近いぞ」

「国防に関わる状況でもありますから。コウシロウ殿は、その辺りは了解してください」と思います」

ハンスの言葉通り、いくらお願いという形であったとしても、こうして国の大貴族から頼まれれば、簡単には断れないだろう。断ったらどうなるか、などといった恐怖は必ず付いてくる。

「俺もそうだろうとは思うんだが。とにかく、コウシロウ殿に問題ないかどうか確認をして、それから足の確保だな」

「足の方も厄介そうですね」

書類には、足、つまり移動手段の指定もあった。

これがまた、どうにも面倒事になりそうなのである。

ハンスは苦い顔を崩さず、眉間に寄った皺を指で伸ばした。

「まあ、どうにかなるだろう。別に何かあるわけでもないし、今回は単なる立ち会いだからな。何も起きんさ」

無論、何も起きないはずがない。

またしても思いもかけない事件に巻き込まれることになろうとは。

このときのハンスは、知る由もなかったのである。

2 祭り料理の準備をする男

何処の国にもお祭りの定番料理があるように、ハンス達の住む国にもそれがあった。その一つが、根野菜と狐で獲れた動物の肉を煮込んだ、「バデッリーオ」というごった煮だ。春祭り定番の料理であるそれは、その温かさと言みから、子供には食事として、大人には酒の肴として人気があった。

根野菜は保存の利く種類のもが多く、冬になるとどの家でも大量に備蓄する。

春になって余ったそれらを一遍に使い、豪華に肉も入れて楽しむことで、冬のうつぶんを晴らし、豊作を願う。

バデッリーオは、とにかく長時間をかけて煮込む。

野菜と肉の旨みを最大限に引き出すためだ。

大鍋で野菜を煮込み、軽く焼き目を付けた肉をそこに投入する。

このとき、肉はなるべく沢山の種類を入れるのがコツとされていた。

冬に子供を産み育てる獣が多いこの一帯では、春は狩猟の季節だ。

鳥や小型、中型の獣を捕って来て料理に使う。

大切なのは内臓などの肉もすべて入れる点だろう。

くつくつと煮てとろろになった肉。コリコリ、ネットリ、様々な食感の内臓肉。

それらと一緒に根野菜を煮付けることで、実に滋味深く、美味い一品が出来上がるのだ。ちなみに、この料理を屋台で買うと、素焼きの器に盛られて渡される。

値段は安いのだが、それなりに頑丈なため、家に持ち帰って使う、という人も少なくない。

「私も父に連れられて、春祭りでバデッリーオを食べたんですっ！もう、美味しくって美味しくって！お皿もきれいに洗って、家に持って帰ったんですよ！」

そのときの味を思い出したのか、ユーナはうつとりとした顔で両頬を押さえた。

ほうっと溜め息を吐く様子は、まるで好きな人を想う乙女のようにだ。

これが食べ物の話題だと知らなければ、恥じらいのある表情に見えたかもしれない。

しかし、これまで如何にバデッリーオが美味しかったかを何度も聞かされていたコウシロウの目には、当然そんな風には映らなかった。

にまにまと笑うユーナは、微笑ましく、可愛らしい。

ユーナは店を手伝っている、コウシロウの弟子であった。以前コウシロウの料理を食べ、その味に惚れ込み、住み込みで働くようになったのだ。

コウシロウはにつこりする。

「よほど美味しかったんですね」

「はいっ！冬は、ずーっと麦と根野菜しか食べられませんから！うちの村は冬に狐をする人も居ませんし、お肉も久しぶりでっ！」

興奮気味なユーナの声に、コウシロウは嬉しそうに耳を傾ける。

そうしながらも、その手は鍋を掻き混ぜ続けていた。

中身は、今まさに話題になっている、バデッリーオだ。

といったも、使っている肉はケンイチの牧場から仕入れた食材なので、正確には別物である。

バデッリーオは、あくまで狩りで獲った肉を使うからこそ、バデッリーオと呼ばれるのだ。

だからコウシロウが今作っているのは、「パデッリーオっぽい煮込み料理」というのが、正しいところだろう。

何故^{なぜ}こんなものを作っているかといえば、春祭りの出店で振る舞う新メニュー開発のためであった。

参考用に、とりあえず定番の料理を作っているのだ。

数日前。春祭りのために開かれた寄り合いで、コウシロウは街の顔役にそれを依頼された。ケンイチをはじめとした日本人達の働きにより、ここ最近、街とその周囲の村々は豊かになってきていた。

魔獣に襲われる心配もなく、怪我^{けが}や病氣も直ぐに治してもらえる。

それだけでもすごい進歩なのだが、さらに影響を与えたのが、イツカが作ったゴーレムの貸し出しだ。

ハンス達が住む街の周辺では、多少ではあるが冬になると積雪^{せきせつ}がある。

雪の積もった畑は、除雪^{じよせつ}さえすれば冬野菜を育てられるのだが、凄まじく労力が必要とする作業なのだ。

その労働力を担^{にな}ってくれたのが、イツカのゴーレムだった。

人間を圧倒的に凌駕^{りやうが}するその力が、遺憾^{いかん}なく発揮された。

おかげでこの冬は、どこの家庭でも蓄えを極端に減らさずに済んだのである。

それだけでなく日本人達の活動により、街と周辺の村々は随分活気づいていた。

言ってみれば、今この辺り一帯は好景気なのだ。

それ故に街の顔役が、春祭りを大々的に開催することで、さらに住民達を元気にしよう、と考えた。

キョウジに新しい遊戯の出店を頼んだのも、コウシロウに新メニュー開発を頼んだのも、そんな理由からだった。

「さて、もういいですかねえ」

コウシロウは鍋を混ぜる手を止めた。

近くに置いてあった器を手に取り、鍋の中身を盛り付けていく。

味見用であるためか、その量は少ない。

漂^{ただよ}ってくる香りに、ユーナの顔が段々と華^{はな}やいでいった。

その料理の上に、コウシロウは仕上げに刻んだ野菜を振りかける。

丁度ネギのような、薬味になる野菜だ。

「さあ、どんな塩梅^{あんばい}ですかねえ。あがってみてください」

コウシロウはユーナの前に、器を置いた。

ごくりと喉^{のど}を鳴らし、ユーナはそれを持ち上げる。

器の反対の手に持っているのは、フォークやスプーンではなく箸^{はし}であった。

盛り付けなどにも便利なので、この店で働くようになってから扱いを覚えたのである。ユーナは早速、茶色い根野菜をつまみ上げた。

実家でも頻繁に食べていた野菜で、煮込めば煮込むほど旨みが出る。

スープの旨みも吸収するので、こういった料理にはうってつけなのだ。

口の中に入れると、ほわりと温かさが広がった。

ついで、野菜に絡んだスープの味を舌が捉える。

沢山の野菜と肉から染み出した旨みが、調味料によってよくまとめられた味だ。

味付けは、塩と、この国ではよく使われる香辛料が幾つか。

そして、地元特産の香草だ。

ハンス達の暮らす街のバデッリーオは、少々濃厚だった。

とろりとしたスープは、シチューのようでもある。

だが、それに対してコウシロウの作ったものはさほど強い味ではなく、野菜や肉の旨みが存分に引き出されていた。

ユーナが野菜を噛み締めると、スープに溶け出した旨みの塊が、一気に口の中で混ざり合う。

じわじわと広がってくる極上の味わいに、ユーナは小さく体を震わせた。

口に入れたものをしっかり吞み込み、今度は肉に箸を伸ばす。

おそらく猪型の魔獣の腸だろう。キレイに下ごしらえされた内臓の肉は、白く、さらさらと輝いて見えた。

ユーナはそれを口に入れると、ぐっと噛み締めた。

こりつとした、確かな歯ごたえ。

内側に付いた脂から、どんどん肉汁が溢れ出してくる。

これは、焼いた肉とはまた違う種類の肉汁だ。

「美味しいっ！ 美味しいですっ!!」

目を輝かせながら絶賛するユーナの様子に、コウシロウは嬉しそうに目を細めた。

「お口に合って良かった。すこし上品に作りすぎたかと思っただすがねえ」

「え？ あ、確かに、お祭りで売っていたのは、具の大きさも不ぞろいでしたね」

顎に指を当て、ユーナは首を傾げた。

言われてみれば、記憶の中のバデッリーオは、もって大雑把な料理だったはずだ。

野菜を一口大にし、崩れやすい野菜には細工まで施してある。バデッリーオに比べればとても上品だといえる。

「いやあ、悪い癖ですねえ。必要ないと思っただけでも、こういうことをしてしまうんですよお」

コウシロウは苦笑しながら、後頭部を撫でた。

「まあ、これはこう作ったらどうなるか、という試して作ったものですからねえ。これで良いでしょう。問題は、ここからですね！」

今回は新メニュー開発が目的なので、バデツリーオは言葉通り試しに作ってみただけだった。問題なのは、これから作る料理の方だ。

「あの、やっぱり私もお手伝いをした方が……」

ユーナはおずおず手を上げながら言った。

今日、ユーナは一切の手伝いを禁止されている。

出店で出品する料理は、味も大事だが作る過程も重要だ。

料理が出来上がる様子がじっくり分かり、音や匂いが人を呼ぶ。

完成していく見た目さえも、料理の一部なのである。

そんなわけで、今日のユーナの仕事は料理を作ること、ではなく、調理の過程を見て、試作品の味見をしながら意見を言うことなのだ。

「おやおや。いけませんよ？　今回は味見も、見た目も、ユーナさんが頼りなんですからねえ」

「うう……！　なんだか、いつもと違うプレッシャーです」

眉をハの字にして、ユーナは不安そうに呟く。

それを見て、コウシロウはいかにも楽しそうに笑った。

ユーナの恨みがましい視線を浴び、コウシロウは何とか笑い声を吞み込む。

「作っている様子を観察しながら、実際に食べてみる。これも、上達には大切な要素ですからねえ。頑張りましょう」

「は、はい！　頑張りますっ！」

ユーナは意を決して、ぐっと握りこぶしを作る。

コウシロウはにっこりと微笑み、再び厨房の方へ体を向けた。

「さあ、私も頑張りましょうねえ」

腕まくりをして気合を入れると、コウシロウは調理に取りかかった。

調理、とはいっても出店でできることは高が知れている。

精々、煮るなり、焼くなりして、盛り付けるくらいだ。

専用の道具を持ち込んで作るのも不可能ではないが、それには準備費用がかかりすぎる。なるだけシンプル。目で見て楽しい料理。

それが、今回コウシロウの目標であった。

「まずは、これからいきましよう」

最初に用意したのは、二種類の芋と粉を振った魚、衣をつけた鶏肉だった。

芋は、熱を加えると粘り気が強く出るものと、ほくほくしたものとがあり、それぞれ味

わいがまったく違う。前者は、日本の野菜で言うサトイモに似ている。後者は、ジャガイモが一番近いだろう。

粘り気の強いものは一口大に、もう一方はフライドポテトの形に切つてあつた。魚の方は、掌大の湖の魚だ。

地球の魚ならアジに近い。以前、ミツバが発見した湖で釣られたものである。そのまま焼くと脂が少ないものの、味が濃いため加熱調理に向いた魚だ。今回用意したのは、このエラと内臓を取り出し、小麦粉と香辛料をまぶしたものだつた。

最後の一つは、茶色いドロツとした衣をまとつた鶏肉。

醤油と匂いの強い香草で漬け込み、小麦粉が混ぜてある。

すなわち、これらはすべて、油で揚げて食べる料理なのだ。

揚げ油は、三種類用意してある。

果実の種を搾つたもの。

猪型魔獣の脂を精製して作つたもの。

マメから取つたもの。

果実の種油は芋に使う。

油のクセがつきにくくカリツと揚がるので、芋本来の甘みを引き出せるのだ。

猪型魔獣の油は魚に使う。少々香りが強く油が残る気味になるのだが、淡白な魚にはこ

れがもつてこいだつた。

最後の豆油は鶏肉に。

芳ばしい香りが衣に付き、鶏肉のジュシーさに良く絡むのである。

鍋は四つ用意されていた。同じ鍋で違う食材を揚げてしまうと、匂いが伝染つてしまうからだ。

「鍋を四つ持つていくぐらいなら、屋台でもできるでしょうしねえ」

四つの鍋すべてに注意を払いながら、コウシロウは器の用意を始めた。

出店では盛り付けに使う容器も、大変重要になってくる。

食べ歩く人が多いため、第一条件として持ち易くなければならない。

コウシロウが用意したのは、先を尖らせて丸めた三角形の紙容器だ。

丁度、クレープのような形である。

「それなら、持ちやすいですね。ほかの屋台でも、同じようなものを使っていますし！」

「ええ。なるべく揃えようと思ひましてねえ」

コウシロウは嬉しそうに頷いた。

数分後、食材が揚げ上がると油を切るための網の上に移していく。

完成したのは、二種類のフライドポテト。

それに、川魚と鳥のから揚げだ。

最後にフライドポテトに塩を振りかけて混ぜれば完成である。

ユーナは、ぐくりと生唾なまばを呑み込んだ。

「揚げているところを見てると、食欲がそそられますねっ！ カラカラ、ジュージューって音を聞いているだけでお腹が空すいてきました！」

「あつはつはつは。揚げ物は、耳にも楽しいですからねえ。お腹が減っているときに音を聞くと、何を作っているんだろうと気になりますから」

料理に付いた余分な油が落ちたのを見計らい、コウシロウは金属製のトングを取り出した。紙の器を片手に持ち、ユーナの方へ向き直る。

そして、芝居しばいがかった様子で口を開く。

「さあ、お嬢さん。どれを包みましょう」

コウシロウの言葉に、ユーナはきよんとする。

さしずめ出店の店員ということだろうか。

その意図を察したのか、彼女はにっこりと笑顔を見せた。

「じゃあ、四つともお願いします！」

「はいはい。直ぐに盛り付けましょうねえ」

楽しそうにそう言うと、コウシロウはトングをカチリと鳴らした。

まず最初に、細長いフライドポテトを三角形の容器の片端に寄るように入れ、余った方

のスペースに一口大のフライドポテトを詰める。

その上に魚と鳥のから揚げを、三つずつ乗せた。

仕上げに、木の長い串を二本ほど刺せば完成である。

「はい、どうぞ」

「うわあ！ ありがとうございます！」

目の前に差し出された料理を、ユーナは両手で受け取った。料理自体は熱々で湯気を上げているが、手にした容器はそれほど熱くない。かなり断熱性が高いようだ。

串を一本抜き取り、ユーナはどれから食べるべきか唸っている。

「魚から食べてみたらどうでしょう。お勧めですよ」

その言葉に従って、ユーナは串を魚のフライに突き刺した。片手ほどの魚を半分に切ったそれは、頭も尾も付いたままだ。うつすらとまぶされた衣が、少し焦げたキツネ色になっていた。香辛料と香りの強い油の相あまった匂いは、食欲を掻き立てる。

「骨ごと食べられますからねえ、どうぞおあがりください」

「はい！ いただきます！」

ユーナは勢いよく、頭の付いた魚のから揚げに嘍かり付く。カリッとした歯ざわりの良い食感である。ザクザクと噛み締めると、魚の旨みが滲にじみ出てきた。

もともと少し淡泊すぎる魚だったが、その味は油が程よく衣に馴染み、絶妙の風味を醸か

し出している。動物性の油は、魚にバランスの良い油分と香りを与えてくれているのだ。ついで一口大のフライドポテトを齧^{かじ}った。

ネットリとした甘みと塩気が口内で広がり、どんどん次が食べたくなる。それを我慢して、今度は細長いフライドポテトを食べてみた。

カリッとした食感の後に、芋の味わいと塩気。

これもやはり、後を引く美味^{うま}さだ。

「んー！ お魚のフライ、さつくさくで美味しいです！ お芋も二つとも違う食感で、楽しいです！」

「それはよかった。お口にあったようですねえ」

さらにさらに目を輝かせて言うユーナを見て、コウシロウはほっとした様子で頷いた。違うタイプの二つのフライドポテトは、どちらも成功したらしい。続いて、ユーナは鳥のから揚げへ取りかかった

さくさくの衣に歯を通すと、ジューシーな肉汁が溢れてくる。

肉は醤油と香草でしっかり味付けされており、舌の上にとっしりとした旨みが広がった。ここでユーナはフライドポテトを齧^{かじ}てみた。

肉の味と芋の風味が交じり合い、これが奇妙なほど良く合った。どちらも食べ応えのある揚げ物なのに、後を引く美味しさのため、どんどん口へ運びたい衝動に駆られる。

「ポテト二種類を基本にして、それに鳥か魚、あるいは両方をトッピングする、というメニューで売り出そうと思うんですよ。如何^{いかに}でしょうかねえ？」

「いいと思います！ でも、ぜったいどっちもつけちゃうと思います！ すごく美味しいですからっ！」

興奮気味なユーナは、再びフライドポテトを食べる。

後を引いて、止まらなくなっているのだ。

「これは大丈夫そうですねえ。では、もう一品の方も支度しましょう」

「あ、はい！ 分かりました！」

ユーナはぐっと気合を入れた表情を作り、もぐもぐと咀嚼^{そしゃく}する。

その様子がおかしかったのか、コウシロウは楽しそうに笑っていたが、突然はっとしたような顔をドアの方へ向けた。

「どうかしたんですか？」

困ったように眉を蹙^{ひそ}めるコウシロウを見て、ユーナは何が起こったのかと息を呑む。

千里眼の能力のことは、ユーナもよく知っていた。だから、何か異変があったのではないかと思っただけである。

その懸念は、直ぐに現実のものとなった。

ドダダダダダ！ という地響きのような音が鳴り響いてくるではないか。

何かの足音のようでもあったが、それはあまりにも力というか、得体の知れない破壊力がこもっていいような音であった。

「あつ！」

そこで、ユーナはその音の正体に気がついた。こんなパワフルな音を発せられる者は、少なくとも、ユーナの知る中では一人しかない。

音はどんどん近づいてきて、ついには店の目の前まで迫る。

何者かは、そこで足を止めたらしく、地響きのような音が止んだ。代わりに聞こえてきたのは、ゴリゴリと地面を削り、ブレーキをかけているような音である。

そして――。

バンッとドアが開き、小さな赤い塊が店の中に転がり込んで来た。

片方だけ結んだ髪の毛の束を靡かせるその塊は、元気いっぱいに声を上げる。

「ちよっとまったつすー!!」

「おやおや。いらつしやい、ミツバさん」

「こんにちわつす!!」

コウシロウの挨拶に、ミツバはすこぶる良い返事をする。

ユーナも慌てて、「いらつしやいませ!」と声を出した。

「ムッチャいい匂いがするつす! おやつ時間にこんなオイニ、をさせてるなんて、反

社会的つす! テロリズムつす!」

「え、ええ!?」

なにやらご立腹なミツバに、ユーナは圧倒された。

ミツバの言うとおり、今はお昼の時間も終わった午後三時ごろだ。

一旦店を閉めて、新しいメニューを試すにはもってこいの時間帯である。

「ミツバさん、たしかお祭りの準備の手伝いがあるとか言ってませんでしたか?」

ミツバはお昼をコウシロウのお店で食べたとき、この後は町外れの広場でお祭りの準備を手伝うと話していたのだ。

広場からコウシロウの店までかなりの距離がある。匂いどころか、たとえ大声で叫んだとしても聞こえないだろう。

「なに言ってるんすか! 美味しいものの匂いがしたら街の反対側でも分かるつすよ!」

至極まじめな顔のミツバに、ユーナは思わず納得してしまった。

超身体能力という特殊能力を持つミツバは、そのせいなのかなんなのか、異様なほどの健啖家である。その食べ物への執念は凄まじく、数キロ離れた匂いですら嗅ぎ分けると豪語されても、信じてしまうほどであった。

威嚇の唸り声を上げそうなミツバを前に、コウシロウは楽しそうに微笑んだ。

「実は、お祭りで出す出店の料理を試食してもらっていたんですよ。よろしければ、ミツ

「バさんも如何ですか？」
「うわあーいっすー！」

コウシロウの言葉に、ミツバは飛び上がらんに喜んだ。というか、実際に体は宙を舞っていた。今回は屋根があるので跳躍距離は控えめで、垂直方向に二メートルほどだが、「ユーナちゃんも味見は得意かもしれないっすけど、この街じゃあ二番目っす！ 一番は当然自分っすけどね!!」

ジャキン！

というような効果音が鳴りそうなポーズで、ミツバはドヤ顔をキメる。このアッパーなテンションにも馴れたのか、ユーナは若干疲れた苦笑を漏らすだけで。

そんな二人を見て、コウシロウは目を細めた。

「では、もう一品作りましょうかねえ。まあ、あまり珍しくないものだと思いますが」
「楽しみっす！」

「でも、その前に。きちんと扉を閉めましょうね？」

「あ、忘れてたっす！ 閉めてくるっす！」

コウシロウに言われて、ミツバは慌てて扉を閉めに向かった。

外見年齢的には、年の離れた兄弟といったところだろう。

だが、ユーナの目にミツバとコウシロウの関係は、孫とおじいさんのように映った。



「さあ、はじめましょうかねえ」
「はいっ」

につこりと笑うコウシロウに、ユーナも嬉しそうな笑顔で返事をした。

3 足を用意する男

レインが受け取ったロックハンマー侯爵領主館からの連絡は、ハンスの頭を悩ませた。セルジュ・スライプスを中央の役人に引き渡す際に、ハンスに立ち会えと言う。

これは、街の警備の責任者がハンスであるため、当然のことだろう。悩みの種は、それ以外の「要請」であった。

一つは、千里眼能力を持つコウシロウの同行。

万が一の事態に対応するための、策の一つなのだろう。コウシロウの目があれば、たとえばセルジュが脱走したとしても、ほぼ間違いなく捕捉が可能だ。その信頼度は、例の一件でロックハンマー侯爵自身も十分承知していた。

そこを買っての、「お願い」なのである。それはまだいい。もう一つの要請。

これが実に、厄介だったのだ。

それは、ケンイチの配下の鳥に乗って来て欲しい、というものだったのである。その理由は、言ってみれば性能テストに近い。

魔獣達はあくまでケンイチについているのであって、軍隊に組み込むことはできないだろう。とはいえ、一体どのくらいの能力を持っているのか、知っておく必要がある。たとえば、その移動力の程度などだ。

ハンス達の国は魔獣との戦闘経験があるため、戦闘力は十分に分かっていた。だが、どの程度の移動、移送能力を持っているかは未知数だ。今回はそれを確認する良い機会だと、ロックハンマー侯爵は考えたらしい。

だが鳥の魔獣達は、あくまでケンイチの配下である。ケンイチに断られれば、それまでだ。要請にも、「無理強いはしない」と記されている。

ハンスとしては、そもそも鳥型の魔獣での移動というのが嫌で仕方がなかった。どうにも良い予感がしないからだ。

コウシロウだけならばともかく、魔獣達が絡むとろくなことになる。

そもそも、この街だけならいざ知らず、ほかの人里に魔獣を近づけるのは抵抗があった。魔獣というのは、人間の力では太刀打ちの難しい相手だ。

種類や個体にもよるが、場合によっては数百人規模の兵士が一匹相手に苦戦する、文字

立ち読みサンプル はここまで